

国境なき子どもたち (KnK) カンボジア
ビデオワークショップ 2004
実施報告書

主催 : 特定非営利活動法人国境なき子どもたち (KnK)

協賛 : 松下電器産業株式会社

報告者

ビデオワークショップ講師 清水 匡

作成日 2004年11月30日

I. 開催にあたって

デジタルビデオカメラは、その性能が向上するとともに子どもでも手軽に使用できるようになり、日本では映像制作が身近に感じられるようになってきた。一方、カンボジアをはじめとする開発途上国においてデジタルビデオカメラは依然として贅沢品とされ、子どもたちはおろか大人でも触れる機会さえないのが現状である。

KnKは設立以来、毎年アジア各国における援助活動の紹介ビデオを制作してきたが、スタッフが活動の様相を撮影する際に撮影対象となる現地の子どもたちがデジタルビデオカメラに非常に強い関心を示してきたことから、こうした子どもたちに向けたビデオワークショップを開催する機会を模索していた。そして2004年夏、松下電器産業株式会社様より撮影機材一式を提供していただいたことにより、カンボジアにおけるビデオワークショップ開催を実現することができた。

II. 目的

KnKはカンボジアの北西部バタンバン市にて、元ストリートチルドレンや孤児、極度の貧困家庭の出身者、そして人身売買の被害に遭った子どもなど恵まれない青少年のための自立支援施設「若者の家」を運営している。ここで生活する子どもたちは、「若者の家」に来る以前は自分自身が生き延びるために、そして家族を養うために日々を過ごしてきており、その間は自分の将来を考える余裕などまったくない生活を送っていた。今回のビデオワークショップは、こうした厳しい生活を経てきた青少年を対象に、客観的に物事を考え自己表現力を育成することを目的とし、また、カンボジアの限られた職業選択肢以外にも世の中には様々な職業があることを知る体験実習の機会ともなることを期待して行われた。

III. 開催期間

2004年8月3日～25日（詳細は後述、VI.項を参照）

IV. 参加人数

バタンバンの「若者の家」で暮らす男女計42名の中から希望者を募ったところ12名の応募があったため、そのうち参加意欲の強い下記の男子6人、女子3人を選出した。

ターイ	男子	17歳	義務教育7年生(=日本の中学1年生相当)
ソンボン	男子	18歳	義務教育5年生(=日本の小学5年生相当)
チャンタ	男子	18歳	義務教育5年生/自動車修理訓練生
ラタナック	男子	19歳	義務教育7年生(=日本の中学1年生相当)
セナ	男子	19歳	義務教育7年生(=日本の中学1年生相当)
ロウ	男子	16歳	義務教育7年生(=日本の中学1年生相当)
ソボン	女子	22歳	グラフィックデザイン訓練終了(就職試験結果待ち)
サムナヴィ	女子	20歳	美容師訓練生
サムーン	女子	20歳	裁縫訓練生

V. 講義内容

受講者が初めてカメラに触れる子どもたちであることと講師の説明が通訳を介するため、図解を多用して進め、実際にカメラを使用しながら楽しく映像制作の基本を学べるように心がけた。また、自己表現の育成を目的にしているため、常にお互いが自由に意見を出し合えるような雰囲気を作ることを目的にチームを3つ作った。1チームは3人で構成され、カメラマン係、監督係、アシスタント係と担当に分かれて作業した。その結果、各自が最も興味がある内容を担当でき、集中的に、かつ責任を持って役割を果たすことができた。

ビデオ制作の基本を大きく8つに分け下記の通り講習を行った。

日付	講義	内容
3日	①ビデオ作品ってどういうものだろう？	・ ビデオ作品や番組ができるまでの構成を説明する。機材の紹介。
4日	②デジタルビデオカメラの使い方を覚えよう	・ 日本の歴代レポーター3名にも手伝ってもらい、カメラ、三脚、マイクを実際に触り、機材に慣れ親しむ。
5日		・ カメラのポジションやアングルによる画角の違いを理解。
6日	③実際に撮影してみよう	・ カメラの位置を考えて撮影の練習。
7日	④インタビューを用意し練習してみよう	・ カメラマン係、監督係、アシスタント係と担当を決めチーム分け。 ・ 監督係はインタビューの質問を考え、カメラマンとアシスタントはインタビューの場所を決めカメラのセッティングを行う。 ・ 歴代レポーターを相手にインタビューを練習
8日	休日(予備日)	
9日	⑤作品の内容・テーマを考えよう	・ 3チームで何の作品を撮るかテーマを話し合った結果、3チーム合同で1作品を作ることに決定。 ・ テーマは「ストリートチルドレン」。(話し合いのポイントとして、誰に見せたいのか、また自分たちは何を伝えたいのかを中心に考えさせた)
10日		・ 撮影場所や場面やインタビューを考え、絵コンテを作成。
11日	⑥作品の構成を考えよう	・ 考えた場面設定の順番を決めていく。(順番を変えることにより話の筋が変わることを勉強)
12日		
13日		・ 絵コンテを元に情景など簡単なものから撮影を開始する。
14日	⑦撮影してみよう	・ 素材を見て撮り足りないもの、失敗したものなどを撮り直し。
15日	休日(予備日)	
16日		・ 実際にストリートチルドレンを探し出し、撮影とインタビューをする
17日		・ 回想シーンは劇を演じて撮影。
18日	⑦撮影してみよう	・ 監督係は別の施設の撮影許可を取る。 ・ 別の施設の撮影。
19日		・ 各チームが撮影した素材を全員で見て内容協議。 ・ タイムコードの書き出し。
20日	⑧編集してみよう	
21日		
22日	休日(予備日)	
23日		・ 最初に考えた場面構成を3つに分け、班ごとに編集。
24日	編集してみよう	・ 班ごとに編集したものを一つにまとめる。
25日	作品発表会 (「若者の家」にて、子どもたちおよびスタッフ全員を対象に)	

VI. 作品ができるまで



受講者にかつてストリートチルドレンだった青年がいたため、彼の体験を基に作品を作っていくことになった。初めは全て再現劇で作るという案も出たが、役者を受講者以外から選出することが他の子どもたちのスケジュール的に困難であるため、実際に今なお町で生活しているストリートチルドレンを起用した。

監督係がストリートチルドレンに演出をしている間、カメラマン係とアシスタント係はカメラポジションを決めた。ストリートチルドレンが殴られるシーンなどは受講者が役者となり演技して補った。また、監督係には他の施設の撮影では事前に許可を取るよう指導した。こ

のように外部へ正式な電話をかけることも初めてであったため彼らには貴重な体験につながった。

撮影前に絵コンテでカット割をしていたため、撮影そのものはスムーズに行うことができた。そしてテーマを一つに絞ったことにより、一場面で3台のカメラを同時に使用することが可能となり、講師の目が行き届いただけでなく結果的に編集で使用するカットに選択肢が増え作品の質が向上した。



編集作業は単調なため途中で集中力を欠いた受講者もいたが、脱落者も出ず9人が最後まで自分の担当をやり通すことができた。

なお、今回は子どもたちが実際に作成した映像にメイキングとしてスタッフが撮影した映像を足して日本で制作したものである。ナレーションはビデオワークショップの前半に日本から参加した歴代レポーターの原稿を原案としている。

VII. 作品タイトル

「国境なき子どもたちカンボジア ビデオワークショップ 2004 ストリートチルドレン」

(14分、日本語版およびクメール語版をそれぞれ制作)

VIII. あらすじ

2004年夏、カンボジアにある自立支援施設「若者の家」で生活する9人の子どもたちを対象にビデオワークショップが開かれました。9人は、同じく「若者の家」で生活する一人の青年、ラタナック君の経験をビデオにすることにしました。

ラタナック君はここに来る前はストリートチルドレンでした。ゴミの中からリサイクルできる物を買ったり、通りで物乞いをしたりして毎日を過ごしていました。せつかく稼いだお金を不良グループに奪われ大ケガを負ったこともありました。

ラタナック君はこう語ります。「路上での生活は危険が多いので、援助施設に受け入れてもらえるならば、施設で生活した方がいいと思います」

IX. 子どもたちの感想

Q : なぜビデオワークショップに参加しようと思ったのですか？

A : 現在、勉強しているコンピューターグラフィックと関連があると思ったからです。カンボジアではビデオワークショップのようなものを勉強できる機会はなかなかありません。ですので、今回のような機会があり、自分はとても幸せだと思います。

Q : 参加してみてどうですか？

A : 今まで知らなかったことばかりで、とても楽しいです。もっと深く勉強したいという気持ちになりました。それから実際に撮影をしてみると、簡単だと思っていたことも意外と難しいと感じました。たとえば、どの角度からどういったシーンを映すかという細かいことに気を配りながら撮影するのは思ったよりも難しいです。このワークショップが3週間で終わってしまうのは本当に残念です。また参加することができればいいなと思っています。

回答：ソポン（女子） 監督係

Q : なぜビデオワークショップに参加しようと思ったのですか？

A : 以前にKnKのスタッフからビデオ撮影を教えてもらい、興味を持っていたからです。もっといろんなことを勉強したいと思って参加しました。

Q : 今はワークショップでどんなことをしていますか？

A : グループに分かれて基礎練習をして、今は一つの作品を作っているところです。この作品の構成やストーリーは自分たちで考えました。ストリートチルドレンをテーマにしています。

1つのグループは、カメラマン、ディレクター、アシスタントで構成されていて、僕はカメラマン係です。

Q : 参加してみてどうですか？

A : とても楽しいです。いろんなシーンを撮影したいと思います。

回答：ターイ（男子） カメラマン係

「僕たちは貧しいからビデオ撮影を学ぶ機会がありません。今回こうしたチャンスがあったので参加しました。前からとても興味があったので嬉しかったです。」

回答：ソンボン（男子） アシスタント係

X. 謝辞

この度、松下電器産業株式会社様より撮影機材一式のご提供をいただき、カンボジアにおける本ビデオワークショップを開催することができました。途上国の恵まれない青少年とはいえ、ビデオカメラといった機材や撮影に対する興味、関心は日本の子どもたちに劣るものではありません。生まれ育った環境ゆえにこれまでこうした機会を得ることがまったくできなかった子どもたちのために最新のデジタルビデオカメラやマイク、ノートパソコン等を快くご提供くださり、このように実り多いワークショップの開催にお力添えくださった同社のご理解とご協力に心より御礼申し上げます。

この子どもたちは、日常生活においては学校教育を受けつつ手に職をつけるため限られた選択肢ではありますが早い段階から職業訓練を受けることを強く望んでいます。この3週間のビデオワークショップ中にも、講師が「ここまでの内容で質問はありますか?」と問うと、「この3週間の講座でプロのカメラマンになれますか?どのくらい訓練を受ければ職業に結びつきますか?」といった質問が寄せられるなど、彼らの置かれた環境や意識が、日本の子どもたちとは大きく異なるものだという事を講師、スタッフともに改めて思い知らされる一面もありました。親も家もない彼らは学校に通えなかった期間が長い実年齢よりも学齢が大幅に遅れています。また、そもそも現在のカンボジアには雇用そのものが少ないこともあって彼らの将来の選択肢はごく限られてしまいがちです。しかし、このビデオワークショップは単なる夏休みのアクティビティというだけではなく、広く社会を構成する様々な職業の存在を発見し、また自分の中で未開発の適性や関心、そして可能性に気付くまたとない貴重な機会となりました。

松下電器産業株式会社様よりご提供いただきました機材一式を今後も有効に活用して、こうした機会を一人でも多くの子どもたちにもってもらいたいと計画しております。同社のご支援に厚く御礼申し上げます。

特定非営利活動法人国境なき子どもたち 一同

<ワークショップの様子>



カメラの基礎を勉強中



カメラアングルを練習



カメラの基本的な構え方



屋外での撮影



ストリートチルドレンを演出



ストリートチルドレンにインタビュー



他の施設へ撮影許可



他の施設での撮影



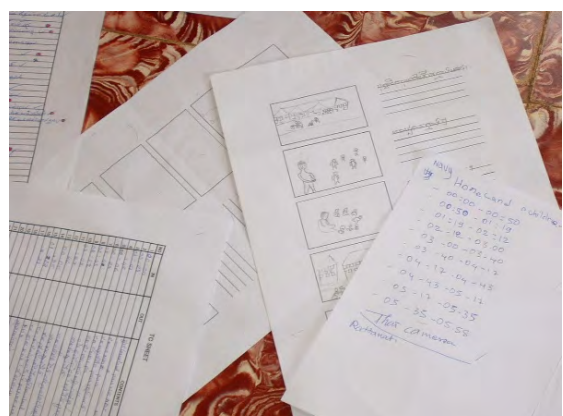
音も念入りにチェックする



撮影したのを見て反省会



輪になって構成を決めていく



今回作成した絵コンテ